

奥中康人著

『幕末鼓笛隊』

——土着化する西洋音楽——

(阪大リーブル 37)

大阪大学出版会 二〇一二年・一一刊

四六 二五七頁 一九〇〇円

今回紹介する奥中康人の著書『幕末鼓笛隊』は、「土着化する西洋音楽」という副題にも示されているように、幕末期の鼓笛軍楽それ自体を研究対象とするものではなく、主として神社の祭礼等に演奏される形で今日まで伝承されて来た、幕末維新期に起源を持つ鼓笛隊の楽曲を、音楽史の視点から調査・研究したものである。その意味で本書は歴史学というよりも、むしろ民俗学的な論考として価値を有する研究といえるかもしれない。本書では、山国隊軍楽保存会（京都府京都市）・天童維新軍楽保存会（山形県天童市）・上山藩鼓笛楽保存会（山形県上市市）・西間下町鼓笛隊保存会（熊本県人吉市）といった、幕末ないし明治以降に編成された鼓笛隊の系譜を引き継ぐもののほか、明治以降にそれらを「模倣」する形で成立した鼓笛隊についても調査対象として取り上げられている。後者のカテゴリーに属するものとしては、おらんだ楽隊（千葉県香取市）・維新勤王隊（京都府京都市）・北海道神宮維新勤王隊（北海道札幌市）のほか、京都市内の熊野神社・元祇園椰神社・西院春日神社・清明神社・藤森神社で結成された鼓笛隊がある。

本書の特色として、著者の専門である音楽史の視点から、日本各地に残る鼓笛隊が伝承している楽曲を比較・分析している点が挙げられよう。ことに幕末期に成立したと思われる和製洋式の鼓譜について読み説いている点は、注目に値する。この形式の鼓譜を保存しているものとして、山国隊軍楽保存会・維新勤王隊・北海道神宮維新勤王隊といった一連の流れを持った鼓笛隊のほか、上山藩鼓笛楽保存会がある。さらに太鼓の演奏法についても、音楽学の基礎を踏まえて解説をおこなっていることが興味を引く。本書を通じ、著者が現存する鼓笛隊の楽曲に関する研究を詳細におこなっている点は高く評価できるが、これらと幕末維新期の鼓笛軍楽との関係性を論証していくためには、まだいくつかの解明しなければならない課題が存在しているといえる。

まず第一に、現在演奏されている楽曲が幕末維新当時のものを忠実に継承しているのか否かという問題である。時代祭の山国隊を例にとっても、「鼓笛の楽隊は維新当時の参加の残存者もあつたが、猶不十分であつたので、水口謙三郎が京都へ出張して、種々研究したり、見聞して恥ずかしくないものを組み立てて之を楽員諸氏に伝授した」（水口民次郎『丹波山国隊史』山国護国神社九二―八頁）とされており、他の鼓笛隊についても伝承過程で生じた一定の変化を考慮しなければならないであろう。第二に、幕末維新期に成立した各種の鼓笛譜と現存する鼓笛隊の演奏する楽曲との整合性である。当時刊行された鼓笛譜については、蘭式・英式のものが多い種類も残されており、これらを読み解いていくことが肝要であると思われる。

ともあれ本書が、今日まで各地に伝承された幕末維新期の鼓笛隊を实地調査し、音楽史の視点からそれらの意義を考察したユニークな研究であることは論をまたない。一読をお勧めする次第である。

(浅川道夫)